



開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

●編集・発行／横浜市総務局横浜開港資料館
 横浜市中区日本大通3丁目231
 電話 (045)201-2100 企画室内
 ●発行日／昭和61年5月1日
 ●印刷／(有)三信印刷所

収蔵資料の紹介

「関口日記」から

幕末の生麦村の「商人」たち

「関口日記」は、生麦村（現在、横浜市鶴見区）に住んでいた関口家の歴代の当主が一八世紀後半から二〇世紀初頭までの約一四〇年間、ほとんど毎日のように書き続けた日記である。このように長期にわたる農民の日記は全国的にも珍しく、大変貴重なものである。

「関口日記」は関口家の記録であると同時に、生麦村住民の生活の記録でもある。日記には生麦村の人々が多数登場し、当時の人々のくらしぶりを今に伝えてくれる。なかでも、生麦村の「商人」たちについては詳しい記述があり、日記の特徴の一つとなっている。ここでは、日記を中心に「商人」の活動を紹介し、あわせて日記の生活記録としての史料の価値を考えてみたい。

生麦村は当時の「一級国道」である東海道の沿った村で、江戸湾に面した部分には舟着場も持っていた。こうした立地条件から商業活動が発展し、幕末期には多数の「商人」が住んでいた。たとえば、天保一三（一八四二）年の「御改革御取締御出役様江書上帳扣」という文書には質屋・酒屋・米屋など三二軒もの「商人」が書き上げられている。当時の戸数は約二四〇軒であったから、八軒に一軒がなんらかの商業活動をしていたこと

となる。

このように多数の「商人」がいたにもかかわらず、彼らの活動を記した文書は極めて少ない。彼らの経営帳簿は散佚していることが多く、「村明細帳」などの公文書では名前や業種が判明するにすぎない。わずかに彼らの活動をうかがうことができる史料は、事件や訴訟などの際に作成される文書だけである。そういった点からみて、「関口日記」は、村の「商人」の実態を明らかにできる数少ない史料の一つであるといえる。

日記に「商人」関係の記述が多いのは、関口家が「商人」たちに営業資金を貸していたからであった。日記には「金拾四両壹朱也、与次右衛門、是は潮田村より地米、拾八俵買入候に付」といった形で、「商人」の名前や資金借入れの理由が克明に記されている。これらの記述から「商人」たちの取引先や取り扱い品目を知ることができるのである。

現在、関口家の「貸金」の検討を進めているが、その結果、「商人」たちが従来いわれていたよりはるかに活発な活動を展開していたことが分かってきた。たとえば、日記に度々登場する今出屋という「商人」は、関口家から多額の営業資金を借り入れ、大量の米・小麦・醤油・肥料などを売買している。その活動範囲は江戸湾岸全域に及び、廻船を利用して物資を運んでいる。彼の買集めた米は江戸や神奈川宿へ送られ、小麦は醤油の原料として野田町（千葉県）に送られた。また、野田町や銚子町（千葉県）で買付けられた醤油は生麦村に運ばれた後、生麦村及びその周辺地域に販売された。さらに、浦賀町（横須賀市）からは肥料を生麦村に運びこんでいる。今出屋を始めとする「商人」たちの活動は「農間余業」（農家の副業）として認められているにすぎなかった。しかし、実際の活動は、これが「農間余業」かと思うほど専門化されたものであった。

以上のように日記を利用することによって、「商人」たちの活動はかなり明らかになってきた。今後は「商人」だけでなく、さまざまな人々の日常生活が日記から明らかになれると考えている。そこには、幕府が作成した公文書からは決して知ることのできない村の人々の姿がみえてくるものと思われる。

（西川武臣）

館長対談

『関口日記』を語る —内田四方蔵さん・森芳枝さんを迎えて—

館長(遠山茂樹) 横浜開港資料館では、この五月八日から特別展示として『名主日記』が語る幕末展を企画し、現在準備を進めています。その展示の中心となりますのが生麦村の名主・関口家の日記です。『関口日記』は昨年刊行が終ったわけですが、本日は、『関口日記』刊行の中心となり、編集校訂にあたられました内田四方蔵さん、そして、内田さんの御指導で『関口日記』の解説に御苦労なされた森芳枝さんをお迎えし、御二方からお話を伺いたいと思います。なお、今回の展示を担当しています館員の西川さん、井川さんに同席してもらいました。

まず、内田さんから、『関口日記』の概要と刊行するまでの経緯をお願いします。

内田四方蔵 『関口日記』は、九八冊ありまして、文化三年(一八〇六)から明治三四年(一九〇一)までの分が本編全二三巻に、後日発見されました宝暦二年(一七六二)から文化二年(一八〇五)までが別巻三巻に収められています。途中欠年がありますが、一三

九年にわたる日記ということになります。

『関口日記』は、生麦の池谷健治さんが骨董屋から入手したもので、昭和二七年横浜市に寄付されまして、二九年八月設置された市史編集室に入り、現在は横浜開港資料館の所蔵となっています。

関口家は分家でありまして、藤助が初代、二代目が藤右衛門、東作、昭房、昭知と五代にわたっています。藤助の時は金銭の出入りなど家のことが中心ですが、藤右衛門から名主になって、農業日記とは趣きが違ってきました。村の出来事や村の様子がたくさん書かれるようになってきます。藤右衛門は寺子屋の師匠をし、息子を江戸の和氣塾―野村兼太郎さんの『江戸の私塾』にも紹介されています―に通わせています。自身も江戸で勉強し、庶民としては教養のあった方といえます。日記も簡潔に書かれています。名主日記の部類と違っていいかと思えます。

『関口日記』の解説は、最初中学校の社会科学の先生方がやっておりましたが、あまりうまくい

なくて中断してしまいました。わたしの横浜郷土研究会では昭和四三年六月から古文書講読会を石井光太郎さんと始めまして、四三年九月から『関口日記』に取組みました。第一巻の刊行昭和四六年にこぎつけるまで時間がかかりまして、最終巻の奥付が昭和六〇年三月ということ、一七年かかりました。

森芳枝 とにかく素人の集まりですから、横浜郷土研究会で三か月くらい訓練を受けたといいますが、最初はほとんど読めません、一人が一冊ずつ受持ち、解説に二年もかかりました。メンバーもだんだん脱落して残ったのが六人、後から二人加わり、先生方と警察官、教師、元軍人、書店主、飲食店の主婦、医者、サラリーマン、家庭の主婦の私と一〇人になりましたけれど、毎週土曜日の午後、野毛の横浜市図書館の一室をお借りして、よくつづいたものと思えます。始めの一年は石井先生、御病氣になられてから内田先生になったのですが、両先生の御指導がよかったこと、わたしたちのスタートルインが皆同じだったことがよかったのではないのでしょうか。実に和氣あいあい、楽しみながらでした。

館長 『関口日記』の原本の様子はどのようだったのでしょうか。内田 藤右衛門のものは書体がい

りと読みやすいものです。森 藤右衛門が江戸に行っている間は、奥さんが代筆してしまっていて、ぎこちないかな文字ですから大変読みにくかったですね。館長 日記は一般的にいって人の名前とか生活用語など解説しにくいことがあって御苦労されたことと思いますが。内田 用語については地方文書と



内田四方蔵氏

は大きく違っています。わたしは小田原育ちのもので、当時の江戸言葉が小田原言葉に近いこともあって、わりと見当をつけやすかったですね。それと『浮世床』など江戸の雑文学の知識がだいぶ役にたちました。名前の場合は、本来は人別帳を用意しなければいけないのですが、当時は手に入りませんでしたし、なにせ寺子屋式ですから、なにごとともぶつ

け本番で、参考書のみくらべる余裕もなく、とにかく日記にとりついて、悪戦苦闘しながら読み進めました。日記があるかぎり読み通していこうとの考えで、どのくらいかかるかは気にしませんでした。森 昨年五月、完成祝賀会がございましたが、その日を前にして残念ながらメンバーの一人が亡くな

りました。奥様はわたしに、『関口日記』は一体何時終るのですかと聞くと、主人は死ぬまでだろうねと言っていました。本館にそんなりました」と感慨深げに話されました。寺子屋式だったから永く続いたのですね。一七年も経ったのという感じ。土曜日が図書館の休館日にあたるとうわたしは不満で、ひとつの言葉が字引をひいてわかるとうれしくて、あきませんでした。

館長 解説には自分で歴史を発掘していく喜びがあったのでしようね。内田 印刷にあたってわたしたちは活版を希望していたんですが、経費の都合でタイプ印刷になってしまつて、タイプは校正が大変なんです、ですから第一巻は誤植が多いです。二巻目からは活版印刷になりましたけれど、最初は一年に一冊のペースで、文芸懇話会で励す会をやってくれまして、その時教育長が出席していただきました。森 それだけ大変でしたけれど。



森芳枝さん

内田 森さんが原本を読みながらわたしが校正をしていくというこ

とで、森さんはこれで読解力がだいぶつきましたね。
森 雑誌「日本歴史」で進士慶幹さんが「関口日記」の書評を書いてくださいます。みんなで買ってもらいました。うれしかったですね。

関口家の人びと

館長 「関口日記」の中味にはいろいろありますが、まず生麦村がどんな村だったのか、簡単に村の特色をお聞かせください。

内田 生麦村は東海道筋の村で、川崎宿と神奈川宿の間に位置します。海に面しては、陸の仕事をともよびの漁村です。内海八ヶ浦のひとつで、石高の割に人口が多く、かなりの漁村です。街道筋ですから商人も多く、他の農村漁村とはちよつと違った趣きがあります。また、江戸に近いこともあって、人の行来があり、江戸への出稼ぎ、奉公といった人の出入りもあり、開けた村といえるかと思えます。

館長 こんどの展示ではどういったところをとりあげますか。

西川武臣(館員) 天保期以降、幕末期いっばいをとりあげるつもりです。それでも「関口日記」は一〇〇冊近くありまして、全部はとてまだしきれませんので、東海道筋の村ということに力点を置いて、生麦村の商人と関口家を中心に展示を構成しようかと思つてい



遠山館長

ます。
館長 「関口日記」に取組まれました。どんなところが内田さんは興味深かったですか。

内田 藤右衛門のやつていた寺子屋の実態がいくらかわかってきました。日記の裏紙に、今晚ごはんがすんだら、遊びをするからうちいらつしやい、ということが書いてある。寺子屋というのは昼間ばかりでなく、遊びをまじえながら夜もやつていた。それと、天保五年は江戸で火事が多く、被災者が生麦にやつてくると、その娘が塾に通つてくるということがあって、その熱心さには感心しました。

日記には毎日の天候が記されています。天保の飢饉の時は、七月八月に晴天の日が少ないんですね。涼しいとさ書いてある日があります。また、米の値段が高くなつてくることも日記からわかります。一〇〇文で一升二〜三合買えたのが飢饉になると二〜三合になる。一両が何文かということもわかります。

それから、下層の人たちはわかるようにはででこないのですが、大工の忠五郎という人物はしばしば登場してきます。天保五年忠五

郎は大火後の江戸へ出稼ぎに行きますが、その路用に二両借りに行く、江戸から帰つてくると、神奈川に大火があつて、また出稼ぎに行く、米が高くなると、二食付のところを三食にしてもらいたいといつてきたり、焼芋屋を始めたり、天保の飢饉でだんだん大工の仕事がなくなつて、畑を質に入れることが日記にでてきます。

館長 庶民の生活が具体的にたどれるのは貴重ですね。森さん、女の人はでてきますか。

森 あまりでてこないんですよ。館長 関口家には下女はいたんですか。

内田 子守はいましたが、下女はいなかったようです。森さん、娘さんの話があるんじゃない。

森 藤右衛門には、二人の娘がおりました。長女がおしげ、次女がおちえといひます。二人とも一二年御殿奉公に行つていて、行儀見習をしたことがひとつの自慢になつていたみたい。

おちえさんについては、日記に結納が二回でてきます。初めは結納しただけで御殿奉公にでてしまひ、三年経つてからもう一度結納の事が記載され、結婚の日も記されています。そして一〇年余で離縁してしまひます。気の強い人だったのかしら。今日ここに離縁状をもつてきましたけれど、三下り半とばかり思つていましたのに結構いろいろ書いてあります。



内田 おしげさんは、鶴見の六郎右衛門というかなりの家に嫁いだのですが、六郎右衛門はなまけ者で、藤右衛門は心配して見回りに行く、ある日、酒盛りのどんちゃん騒ぎを井戸端で聞いてしまつて怒つて帰つてくるということがあります。二人ともうまくいっていません。

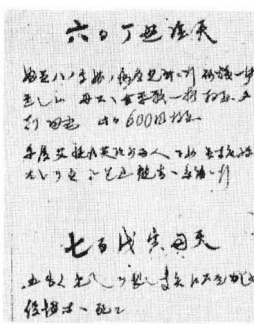
森 おしげさんは五四才で略血して死んでしまひます。二代目享二の嫁のおなるさんも、登戸から嫁いできた人ですが、嫉妬心が強かつたようで、家出をしたり、髪

を切るとおどかしたり、結局離縁されて、江戸へ奉公に行つてしまひます。

館長 一般に街道筋の女の人は気性が強いのでしょうか。

西川 日記の中に離縁の話はしばしばでてきます。当時はあまり抵抗なかつたのではないのでしょうか。井川克彦(館員) 生麦などの村では女性の働く場所が多いので、離縁といつても必ずしも悲惨でないのでは。

内田 最後の昭知の代になります。昭知の演説会によつちゆう出かけています。県会議員にもなつています。新しがり屋というんでしょうか、年賀状制度が始まるとすぐ出ます。日記に宛先が全部書いてあります。それから、カナ文字会に熱心で、日記も筆でヨコ書きにして



います。段落のとり方がおもしろくて、現在は冒頭を一字下げのわけですが、藤右衛門は後のいわゆる新聞段落を使い、昭知はヨコ書きで、行頭にチヨンと点をうって改行の印にするということをやつ

ています。また、自分は酒飲みな
んですけれど、禁酒運動に情熱を
燃やして、アメリカから来た女性
禁酒運動家に会いにいったり、政
府が銀盆を褒美としてけしすのは酒
飲みを推奨することでしたからん
と銀盆廃止の建白書を出したりし
ています。

森 でも飽きっぽいのね。
内田 ヨコ書きも一年くらいで止
めてしまう。

生麦のくらし

館長 ところで、森さんからお土
産にいたたいて、御馳走になっ
ている「亀の甲せんべい」ですが、
森 「関口日記」にしばしばでて
きますものですか。神奈川の名
菓だったとか、今ここにもありま
すように最初は亀の甲の形はし
ていなかったそうです。日記ではお
使いものですね。一折二〇〇文、
一箱四〇〇文でわりと高級なお菓
子だったようです。食べ物結構
贅沢でした。海苔とお茶は江戸の
山本山へ買いに行っていますし、
カステラや中華饅頭なんかにもす
ぐとびついています。

館長 日常的な食事は。
内田 あまりわかりませんが、味
噌、醬油はよく使えます。
森 それも買っているんですね。
自分のところは米だけで、家では
何も作っていないようです。
内田 野菜もかなり買っています。
館長 普通の地主とはちよつと違

うようです。この頃ですと、多く
は田畑を小作に出す一方で、人を
雇って自家で耕作もしていますね。
内田 客の馳走はできてきて、
よく寿司をだしています。鰻は生
麦村の商人が吉田新田で養殖して
いまして、その資金を関口家で貸
しています。

館長 金銭の出入はわかりますか。
森 弘化二年(一八四五)以降で
すね。日記とは別に金銭算として
まとめて記されるようになります。
内田 収入の主なもの小作米を
売って得ていますが、質屋をやっ
ています。それから、金貸しです
ね。明治になると、貸し先が神奈
川から横浜へとひろがってきます。
そして、あやしむ者にまで貸すよ
うになって、利息も普通は一割二
分五厘ですが、二割四分なんても
のがあります。そんなことで収入
の道がだんだんせばまってくるこ
とがあります。

館長 衣類はいかがですか。
森 綿は自家用で作っていますが
糸は紡いでいないようです。でも
度々色を指定して縞柄を書いた図
があります。染の注文なのですね。
内田 ほとんどは古着屋から買っ
ています。棧留はずいぶんできて
ます。

森 紬、絞縮緬、黒縹子、棧留縞
青梅棧留、袖珍、ごろふく帯地と
か。
内田 新しいものは江戸から買い
入れています。大丸、越後屋(後

の三越)ですね。漆器は日本橋の
黒江屋からといった調子です。
館長 それは売りにくるんですか。
内田 いえ、買いに行くんです。
行商では、筑前遠賀郡芦屋町から
年一回船で来る関屋清次郎から茶
碗や井類を買っています。

内田 「関口日記」にはその他に
いろいろ面白い話がでてきます。
村の者が行方不明になって鎌倉滑
川の紙屑問屋に身を寄せていたこ
とや、無宿者の話で、生麦で盗ん
だ品を神奈川で売りさばこうとし
て捕まったことなど、興味深い出
来事がいくつもあります。ですけ
ど、日記ものは深く追求していく
ことがなかなか難しいですね。

館長 それは日記の特徴だと思
います。それだけに全部刊行するこ
とが重要になってきます。細かい
事柄を寄せ集めてみると、歴史の
流れが明らかになってくるのでし
ょうから。

森 内容までたちいってというこ
ころまでいきませんね、読むだけ
で精一杯。そうそう、文政九年(一
八二六)シーボルトの『江戸参府
旅行記』にでてくる白熊を飼った
茶屋の話がありました。白熊が死
んだ時お墓を作り、戒名もつけて
いるんですね。そのお墓は生麦に今
も残っています。
内田 細かいところにこだわらな
かったから永く続いたのでしょう

けど。
森 とにかく素人のわたしたちを
相手に一七年もの長い間、解説、
添削、校正、編集と教えながらの
内田先生の御苦勞は大変でした。
しょうとつくづく思います。

館長 井川さん、西川さん、こん
どの展示の企画を担当しているわ
けですが、「関口日記」の内容に
ついていかがですか。

井川 生麦では、「頼母子講」が
盛んですね。その「講」の発展と
ともに、生麦から商人が出て、
東海道沿いはこちらなんですが、横
浜へ出ていく者もある。その過程
が非常に興味深く、今回の展示に
うまく表現できればと思います。
西川 「関口日記」を通して、生
麦の商人たちの動向をある程度追
うことができます。関口家との取
引や関口家からの借金などの記述
によって、営業の様子をうかがう
ことができるんですね。横浜の開
港によってそれまでの農間商いと
いったものがどのようにして変質
していくのかを知ることができ
るのではないのでしょうか。

井川 だけど、やはり全部を通し
て読んでいる人がいないとだめで
すね。
館長 日記が歴史の資料として役
に立つには、長期にわたって書か
れているということが重要で、そ
れが「関口日記」の価値です。地
方文書は主として、支配の側から
書かれているものですから、庶民

の生活を知るうえで名主日記は、
地方文書と補いあう貴重な資料で
すね。
内田 「関口日記」は毎年虫干し
されているんですね。それは当人
が日記の価値を自覚していたとい
うことでもあって、実際日記をめ
くりかえして明日のことを類推し
なければいけないこともあったよ
うです。ですから一三九年も続き
ましたし、また残ったんですね。

森 野間児童文芸賞や芸術選奨文
部大臣賞を受賞している岩崎京子
さんが、「関口日記」に取材して、
『東海道鶴見村』や『鶴見十二景』
などの児童文学を書かれまして、
小さなことから面白いことをひき
だしてふくらましています。

内田 わたしども、「関口日記」
の刊行にあたっては、歴史資料と
して原本に忠実に活字化すること
を念願しました。今回、この「関
口日記」を題材に展示の企画をな
さっているということで大変あり
がたく、また期待もしております。
わたしどもの気のつかなかったこ
ともでてくるだろうと楽しみにして
います。

館長 近年、地方史の編さん過程
でいろいろな日記が発見されつつ
あります。その活字化は容易なこ
とではありませんが、「関口日記」
の刊行は大きな刺激になっている
と思います。今回の展示もその一
助になればと願っています。今日
は長時間ありがとうございました。
(三月一二日の対談です)

『黒船絵巻と瓦版』展余話

黒船絵巻編者 堀口貞明

—その後の調査から—

はじめに

わたしは先に、「黒船絵巻と瓦版」展(昭和61・3・30)のメイン資料であった「福田本 米艦渡来紀念ノ図(絵巻)」の資料解説と併せて、その編者堀口貞明の紹介を若干試みてみた(当館並書及誌「まくす」四号)。

この絵巻は長大かつ膨大なカット数を有している点で特異なだけではなく、通常知られている黒船絵巻が日米会談の儀礼的場面を中心に描いているのに対して、ペリ―一行のもたらした欧米の文明物のみ焦点を絞って描写した点に顕著な特色をみることが出来る。異質の文明物の摂取に異常なまでの精魂を傾け、記録編集した人物とはいったい何者なのか、誰れしもが興味を持つだろう。その主人公堀口氏に関する調査はこうした関心と併せ、特異な絵巻誕生の秘密やその性格を知る意味においても、是非とも進められるべきである。

これまで知られている堀口氏とは、江戸後期に江戸在住の旗本浦上氏の敷地に居住した儒学者であること。隣人に佐久間象山がいて学術的な交流があったらしいこと。

彼はまた上野国緑野郡緑野村の豪農の出身であったこと。

現在知られている著作は(1)洋邦叢事(嘉永六年)、(2)無名氏策(安政四年)、(3)堂上方献策(安政五年)、(4)堀口貞明筆記(幕末外国関係文書)所収)を数えることができる。その全容については措くとして、俗に言う開明派と同一の志向を窺う事ができるとだけ述べておく。

この傾向と絵巻編集とはどこか底流でつながっているに相違ないのだが、よくわからない。

その後、読者から貴重な情報提供を得て、新たな調査に着手する機会に恵まれた。その成果の一端を紹介し、当欄担当の責務にかえたい。

藤林書簡と再出発

過般、私は同僚・中武香奈美氏から彼女宛の藤林伸治さんの書簡を借覧する機会を得た。その後長文の書簡を戴き、そして貴重な文献を得た。なお電話での教示も得たのである。

藤林さんは堀口氏とは同郷の由で、青年時代から郷土の歴史に取り組んで来られたかたであることを知った。おもなる関心は自由民権

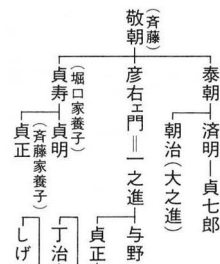
運動の歴史についてであるように受け取れるとともに、幕末においても勿論論議の深い方である。その全容については紙幅の関係上触れる訳にいかないが、借覧の機会を得た文献「慨世餘聞」の紹介については一言、感謝の意味も含めて述べない訳にいかないのだ。

明治二年、堀口貞明の甥齋藤丁治が丸善商店から出版した本を、昭和五〇年、丁治の娘婿(苗木治)が復刻した本である。この本の細かい点は省略するとして、この本の底本となったのは、なんと堀口氏遺著「二子渡洋企」であることを知って驚いた。ついながら、その本には同じく「国益五十一(万延元年筆)」という短論文が収録されている。前書に言う二子とは象山と松陰のことであり、密航事件処罰記録を主体とした編纂物である。後書は友人の需めに応じて披瀝した「富国強兵」論を骨子としたものである。

ここに、堀口氏の遺書は六点を数えることができる。しかも最後の書は彼の思想をうかがうことのできる好資料である。堀口氏についてこのこれまでわからなかった部分が漸次氷解して行くのに恐ろしい程の喜びを禁じえない。と同時に藤林さんと苗木さん(去る三月に御逝去された)に感謝申しあげる。

遺族齋藤信夫氏と資料提供
わたしはこの堀口氏調査を進め

て行く過程で意外な事実と遭遇した。堀口氏と同郷で、親縁者であった旗本齋藤大之進とは従兄弟にあたるという事実、さらに吉原の有名な遊廓松本樓の楼主松本金兵衛(旧名齋藤清明)も従兄弟の関係にあったという事実、そして渡辺華山の門下生で蘭画画家の香玉(齋藤山野)が従兄弟の子であった事がしだいにわかってきた。この関係を図示すると次のとおりである。



この系図は齋藤家遺族の齋藤信夫さんから教示を得たのを略化したものである。齋藤さんは堀口・齋藤家の歴史に詳しく、先になくなられた長兄の遺志を継承しその歴史の深化に情熱を注いでおられる方で、先般長男の方と一緒に来館され、展示された堀口氏遺品(絵巻)と対面されたのである。

なおこの系図について補足しておくくと与野の父は片山兼山の弟で齋藤家に養子に入った人物である。華山との関係は父の指示によったという伝承は充分頷解できると言える。

さて、堀口・齋藤一族は幕末において、儒学者・旗本・遊廓楼主

画家といった人間を輩出した特異な一族であることに驚かざるを得ないのだが、上野国の地方豪農としてその子弟が江戸を舞台にして、学問・政治・商業・美術の世界に進出し、高名を遂げることができた時代に入った好例をみるような気がしてならない。一族の優秀さはもちろんのことであるが、地方名士層の中に江戸と結んで個性の発現が可能な段階を迎えつつあったのではないかと考えてもみている。

おわりに

堀口貞明の調査開始から幾月も経っていない。にもかかわらず多少の進展をみているのは以上に記した方々の教示・協力に依ったため、心から謝辞を申しあげるしだいである。

調査すればするほど問題はふくれあがって行く。最後になって恐縮であるが、堀口氏が横浜開港場普請の情報収集した書簡が発見された。いったい何のために…。近い将来、機会があれば是非とも紹介したいと念じている。

(阿部征寛)



節使ともども2年の遺逸(中央頭巾姿が齋藤大之進、すわっている人物が福地源一郎)

資料よもやまばなし

ジョセフ・ヒコの国体草案をめぐる

横浜開港資料館は、資料の収集・公開から各種普及活動に至るまで幅広い活動を行っている。とりわけ、企画展の年間開催数四回という驚異的(?)数字は、恐らく他施設に類例を見ないのでは、といささか複雑な心境に捕われる。企画から出陳資料の選択、借用、説明文や図表・目録の原稿作成に至るまで、日常業務のほか、その準備に忙殺状態の担当者への慰みは、同僚の憐憫のまなざしと、思いがけぬ資料との出会いである。今回はそんな資料の一つについて、まともな話を綴ることしよう。

標題の、ジョセフ・ヒコの国体草案と出会ったのは、一昨年の秋「ジョセフ彦と横浜の新聞一展」の開催準備中であった。アメリカ・ニューヨーク州シラキュース大学ジョージ・アレンツ・リサーチ・ライブラリーから借用したヒコ旧蔵資料のなかに、一〇数点の日本文の書類があり、その一つが国体草案であった。添削跡の甚しいもの、全文ルビを付したのも混入、奥書やヒコ自筆と思われる英文の書込みによれば、いずれも、幕末から明治初年にかけて、ヒコが幕閣や外国奉行、維新官僚に宛てた

国政改革に関する建言書の草案とのこと。そして、これらの草案類は、昭和十五年三月、横浜史料調査委員会の手で『ジョセフ・ヒコの略歴及びその国政改革草案』と題して復刻、紹介されている。

さて、国体草案は本文二五丁。表紙に墨で「草稿」上に「Written by self in 1863」以下本書の由来を記した英文書込みがあり、本文冒頭に「国体」とある。書込みや奥書によれば、本書は、一八六五年(慶応元年)五月六日、外国奉行阿部越前守に提出したところ、当時の情勢下では採用し難いとして、返却された建言書の草案という。阿部越前守は、奥州棚倉藩々主阿部正外。慶応元年は老中職にあり、外国奉行在任は文久年間である。奥書自体に齟齬がある。また、本書が提出されたことを裏付ける史料は、未だ明らかでない。

その内容は、三二ヶ条(但し、第二第三が欠条、第二一条は一部重複する条項が二つある)にわたる憲法草案である。三院制議会(国持一八大名の院、諸大名の院、百姓・町人の院)の構成と権限、その運用、大君政府の権限、裁判権改憲手続、百姓・町人の自由権利

などを条文化し、大名の領国支配(但し、軍事力・家臣団の保有は著しく制限される)を前提とした連邦制国家を提唱する。三権分立や各国(州)の自治、百姓・町人の国政参加と人権保障、法官の身分保障などは、なお今日の光彩を失っていない。この草案は、如何にして作成されたのか、その詳細な国家権力と制度の規定、民主主義的な内容は、どこから由来したのかと考えているうち、連邦制の採用と云い、植木枝盛の『日本国々憲校』を連想させた。若しやと思い、書棚から岩波文庫『世界憲法集』を取出し、「アメリカ合衆国憲法」(以下、米憲法と略記)と比較したところ、ヒコ草案第一(二二条の原型を、米憲法第一に見出したのである。例えば、大評定所を連邦議会、第一・三詰所を元老院(上院)・代議院(下院)、大君を大統領、日本(大君)政府を合衆国などに置き替えれば、草案は多少回りくどい表現ながら米憲法の各条文とほぼ照合し、条文構成でも米憲法の配列をそのまま追っているのである。草案をいくつか米憲法原文と対照してみよう。

(1)日本六十余州之国法相建候勢は、大評定所ニ在リ(第一一条) All legislative Powers herein granted shall be vested in a Congress of the United States (第一一条一節)

(2)第三之詰所之役人ハ諸国ノ百

姓町人之内より撰、三年限り交代為致(第一一条) The House of Representatives shall be composed of Members chosen every second Year by the People of the several States (同条2節1項) (3)以上三ヶ所之重役ハ、年分極少に而も一度は寄合、国之制度評議致べし、就而は其役人參会之日限ハ先十月朔日ニ定置可申(第四条) The Congress shall assemble at least once in every Year, and such Meeting shall be on the first Monday in December (同条4節2項) (4)国を取候勢ハ、皆々日本之大君に有之(第一三条) The executive Power shall be vested in a President of the United States of America (第二一条1節1項) (5)陸軍々艦総而之大将ハ大君なり(第一三条1) The President shall be Commander in chief of the Army and Navy of the United States (同条2節1項)

(修正第一一条) 以上からも明らかのように、米憲法を当時の日本語に翻訳したものであることがわかる。しかし、言葉の単なる移しかえではない。議員任期や議会開催日のほか、各院構成、百姓・町人の選挙資格各五町歩・一万両以上所有者、世襲大君制、第二一条以下の大君規定大君と大名との関係などは、幕末の日本事情を考慮した米憲法の読み替え、或は全く新しく規定した条項である。 ところで、ヒコの『海外新聞』は、諸外国の新聞記事をヒコが翻訳、助手の本間清雄(のち弁理公使)が口述筆記して刊行したものであった。評定所・国体・法立・書面・存寄などの語句は、両者に共通の用語である。この国体草案は、『海外新聞』の場合と同様、ヒコと或る日本人、当時の社会事情に通じた日本の知識人との共同作業によって、即ち米憲法を日本の実情に合せて翻訳しつつ、これに取捨選択と新たな規定条項を加えて起草されたもの、と考えたい。 奥書の矛盾、提出の真偽、その存在を十分に予想させるヒコ周辺の日本人の問題など、謎は賑らむばかりである。しかし、この草案を残したジョセフ・ヒコという人物を含めて、この国体草案が、我国の幕末史・憲法成立史に大きな問題を投げかけていることに間違いはないであろう。(佐藤孝)



幕末横浜居留地の風雲児

リズレー先生

本名はリチャード・リズレー・

カーライル(Richard Risley Carlisle)、一八一四年、アメリカの

セイラムで生まれた。若い頃からサーカスの一座に入つて腕を磨き、

あらゆる競技の万能選手となつた。サーカス時代には「運動とフルー

トのリズレー先生」で通つていた。ジョンとハリーの二人の息子を任

込み、親子三人で演ずる足芸で一躍有名になる。この「リズレー・

アクト」はギネス・ブックに記録され、似たような芸は「リズレー・

ビジネス」と呼ばれた。

一八四五年、ロンドンに乘込み、ワインザー城に招かれてヴィクト

リア女王の前で公演、さらにフランスからロシアのペテルスブルグ

まで足を伸ばした。ここでライフル射撃とスケートの腕前で名を上げてロンドンへ戻つたある日、彼

のために催された晩餐会で賭けをした。射撃・レスリング・幅跳・

ハンマー投げ・ピリアードでは誰にも負けない、というのである。

彼はそれがおおむね真実であることを立証してみせたが、ピリアードだけは駄目だった。イギリスの

チャンピオン、ロバーツに負けたのである。得意の絶頂から転落した彼は、ペンシルヴェニア州に、

牧場付きの土地を買つて隠棲し、息子達を大学へ入れた。

かつて一世を風靡したことのあつて、功なり名とげた後の引退生活が始まるかに見えた。しかし、

ジョン・ビジネスの魅力が彼を捉えて離さなかつた。一八五一年、

フランスからバレー団を連れて来て、アメリカ各地を巡業したが、

失敗に終わった。その後ヨーロッパへ渡つたまま、彼の消息は

アメリカではしばらく途絶える。一八五八年、

J・R・ブラックは、ゴールド・ラッシュに沸くオ

ーストラリアの鉱山で彼に会つた。一八六四年三月六日、

カークコネル号という帆船が横浜に入港、その乗客の中に、「リズレー先生と

その一座」がいた。同月二十六日、横浜の英字新聞「

ジャパン・ヘラルド」に一座の広告が出た。ア

トラクションの中心は曲馬だったが、前座の

gymnastic exercisesにはリズレー自身が出演した

ことだろう。翌二月、「大成功」だ

つたので、毎晩値下げ興行をするという広告が出た。しかし、ブラックによると、この興行は「大失敗」だった。

彼はそのまま住みついて、宿屋(Flying Horse Tavern)を始めらしい。五月二十一日には、リズレーの名で、体操教室・乗馬教室・貸馬屋・射撃場の開業広告が出た。十一月五日には、イーマン

夫妻と組んで、乗馬教室をアンブイシアターという劇場に改装、翌

年の初め頃、ロイヤル・オリンピック劇場と改称する。娯楽に乏しかつた初期の居留地であるから、

興行はおおむね好評を博した。とくに日本人の芸人の評判がよかつた。

ところが、彼は別な事業に熱中し始める。それはまず氷の輸入であつた。五月四日、

天津氷を満載したJ・W・シーヴァー号が入港した。氷の売り出しは、十五日に

始まり、それと同時に劇場を閉鎖、かわりにアイス・クリーム・サロ

ンを設けた。七月一日には、劇場を再開し、ホテルと雑貨店を併設

それらをひつくるめて、パヴィリオンと称した。ところが、八月十

四日には、氷業に専念することを宣言して、他のすべての施設を競

売にかける。ホテルには買手がついて、

ホワイト夫人の経営するホテル・ド・パリになつたが、劇場

には買手がつかなかつたのか、あるいは居留地唯一の劇場が無くな

ることを惜しんだ人達が勧めたのか、九月二十九日、

イギリス公使パークス・フランス公使ロツシユ・アメリカ代理公使ポトマン等の

後援を得て、はなはらしく再開する。興業第一弾は、小まんとい

う女姓の独業回しであつた。その一方で彼は牧場経営にも意欲を示し、その資金を得るため、

手持ちの馬一〇頭を売り払つた。十月八日、

横浜港を出たアイダ・D・ロジャース号の乗客の中にリズレーの名が見える。明けて翌年

二月二十四日、カリフォルニアから到着した同号に、

リズレーと六頭の牝牛とその子牛が乗つていた。四月六日にはもう

Zoro's Dairyの牛乳売出し

広告が出た。ブラックの「ヤング・

ジャパン」によると、乳牛業はとんとん拍子に

いっただが、そのうち彼は天津へ氷の船荷を取

りに行つた。

さらに、この年の暮れには、日本人から「

へんくつ」と呼ばれた米領事館員

バンクスとともに、足芸の浜錠定吉

一座を引連れて、欧米巡業の旅に出る。こうして彼は

再びアメリカで脚光を浴びることになるが、

その間に乳牛業も氷の事業も人手に渡つてしまつた。こ

の一行の冒険談については、安岡章太郎氏の

『大世紀末サーカス』というノンフィクション小説があるから、それにゆづる。



ロンドンのドルリー・レイン劇場に出演したリズレー親子 (『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』1846年2月7日号)



傷心のミルクマン 牧場を始めたリズレーと、この年バリー夫妻が開いた歌の集いの当たり曲の名(The brokenhearted milkman)をひっかけたしゃれ (『ジャパン・パンチ』1866年8月号)

(斎藤多喜夫)

(本稿執筆に当たっては、名古屋大学の升本匡彦教授より、種々御教示を得ました。末尾ながらお礼申しあげます。)



『名主日記が語る幕末』展の『関口日記』以外のおもな展示物を紹介します。

まず、目をひく大きな「生麦村の街道沿い部分の復元図」があります。東海道沿いの生麦村では江戸時代中期から、旅人相手の茶店

や米穀商・質屋などの商業活動が盛んになっていきました。その具体的イメージを出すために、営業品目・職種を書き入れて、街道沿いの村の軒並みを地図の形に復元したものです。

あわせて、『江戸名所図会』の茶店の絵や

〔名主関口家の〕「購入食品一覧表」、〔村の一商人〕「今出屋久蔵の主な取り扱い品目と取引地」などの図が展示されています。

これらで示される「東海道沿いの村」としての商品経済化の実態

『名主日記が語る幕末』展

が展示の第一のポイントですが、第二のポイントは、『開港場横浜に近い村』にとつての関口・開港の意味を探ることにあります。関口家には二冊の幕末期の写本

が残されていました。一つは、アヘン戦争を紹介した横田楓江の警世の書『海外新話』を同家が書き写したもので、特に世界地図・中国地図・黒船の三葉の絵図が丹念に写し取られているのが目を引き

ます。もう一つは、安政四年一月の日米通商条約の締結交渉の記録『亜墨利加使節対話書』の写本です。『関口日記』の黒船見物などの記事とともに、当事の人々の異国に対する旺盛かつ素朴な好奇心の在り方をうかが

えるものです。

さらに、『関口日記』から明らかにした事実のひとつに、生麦村商人の横浜への進出があります。これについては、生麦村ほか周辺宿村の商人の営業地点を明示した

安岡章太郎『攘夷と開港』

6/7(土) 13時~17時 中区万代町一〜一教育文化センター教文ホール 入場無料 定員五〇〇名

▼講座(講堂)

(1)古文書を読む会(市内地方文書に親しむ)講師 内田四方蔵郷土史家 5/10・24・6/21、

7/5・19、8/2、9/6・20、10/4・18、11/8・22 全12回

13時30分~15時30分 費用6000円(ほかにテキスト代8000円)

(2)資料講読会 開港直後の横浜にきたイギリス船船長の記録『ホームズ船長の日本冒険記』(英文を歴史的背景を考えながら読む

講師 杉山伸也(慶大助教授) 4/26、5/17・31、6/14・28

全5回 13時30分~15時30分 費用2500円(ほかにテキスト代

6500円) 先着50名

(3)横浜歴史講座(前期) 開港期の19世紀後半の焦点をあわせ、日本や横浜と関わり深い、中国・アメリカ・イギリス・フランス・オランダ等の歴史、そのアジアや日本との関係について学ぶ。講師 未定 7/12・26、8/9・23、9/13・27 全6回

(4)こども歴史講座 8月上旬 問いあわせ 横浜市中区日本大通3番地 横浜開港資料普及協会 電話(〇四五)二〇一―二二〇〇

▼寄贈資料(二月~三月)

(1)大正元年海軍大演習観艦式記念絵葉書(三枚組) (藤沢市辻堂染谷詮夫氏)

(2)『Trade Reconstruction

「開港当初の横浜市街区画図」や「開港関係記事一覧表」などが展示されています。彼らの一人は、「吉原道土手」で菓子屋を始めました。『神奈川華郭之光景』は、当館展示では珍しい「横浜浮世絵」ですが、このような目で見るとまた興味深いものがあります。なお、本展示にあわせて、小冊子『名主日記が語る幕末』が当館より刊行されます。「関口日記年表稿」および「解説」を内容とし、展示品の図版も掲げられています。御活用ください。

Number)『横浜及横浜人(創刊号)』2点(旭区白根町 山田武氏)

(3)『明治36年横浜市職員録』『明治36年横浜市役所外務規定』『明治35年神奈川県師範学校規則』『二六節用』『筆等諸乗開方術』『地券』17点(磯子区上町 中島良行氏)

▼出版物・映画

(1)『名主日記が語る幕末』付関口日記年表稿(頒価6000円)

(2)『横浜開港資料館紀要第三号』

(3)映画『横浜浮世絵』16ミリ15分

(4)映画『知られざる史跡巡り―山手根岸編』16ミリ15分

▼お知らせ

開館時間の延長 4/26・27・29 5/1~5/11 展示室・閲覧室とも18時まで(5/1・2 閲覧室のみ19時30分まで 4/28・30は休館



行事開催予定(昭和六一年度)

▼展示(企画展示室)

(1)特別展示『名主日記が語る幕末』5/8~7/30

(2)企画展示『浮世絵師の描いた横浜開港』8/2~10/29

横浜絵のほかに、絵地図・瓦版・和本等によって、横浜開港と、その後の街づくりの様子を示す。

▼展示記念講演会(講堂)

『名主日記が語る幕末』展示記念講演会 7/20(日) 13時30分~16時 児玉幸多(学習院大学名誉教授)

『東海道の宿場と村々』 北原進(立正大学教授) 『江戸と農村』 受講料500円(先着順 一〇〇名)

▼春季特別講演会(教文ホール)

河北倫明『横浜と近代画』

ミニ情報